

自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観 [2]

上地雄一郎・宮下一博*

自己愛(ナルシシズム)の理論的研究と並行したかたちで、それを実証的に捉えようとする研究もかなり行われてきている。恐らく、その最初の試みは、Murray (1938)のものであろう。その後、質問紙(尺度)のみならず、投影法による「自己愛」の指標の検討、様々の新しい観点から「自己愛」を捉えようとする尺度の登場など、1970年代から80年代にかけて、相当数の研究が登場するようになった。

ここでは、その代表的なものについて紹介し、「自己愛」の測定の流れを辿ってみたい。

I. Murrayの先駆的研究—自己愛を測定する質問紙の登場—

Murray (1938)²⁰⁾は、「人格」について44の変数を区別している。そのうち、20変数は顕在的要求、8変数が潜在的要求である。4変数は内的状態に関連したもの(内的因子)であり、残る12変数が一般的性格である。これらの中で、「自己愛」は内的因子の一つに位置づけられている。

Murrayは、自己愛を「形式はさまざまであるが、いずれにしても自己を愛すること」と定義している。彼は自己愛の直接的顕現として、①自己に夢中、自己賞賛、自己憐憫、自体愛、②優越感情と誇大妄想、③自己の見せびらかし、注意・賞賛・名誉・援助・憐憫・感謝を無理に要求する、④無視されたり見くびられたりすることを恐れる、過敏症、過度な内気、被害妄想を挙げている。また、その間接的顕現として、①冷酷な利己主義、利益の追求、支配し勢力を示威しようとする、全能感、②対象蔑視、無関心、見くびり、搾取、嫌疑、憎悪といったもの、人間嫌い、③自己中心性と投影性、全く個人的・主観の見地から世界を知覚し統覚的解釈をする、などの点を指摘している。

Murrayは、自己愛の一つの対極に「対象愛」を置き、その赤道線(中間部分)に「社会愛」を位置づ

けている。そうして、自己愛のもう一つの対極に「自己蔑視」を置いている。

Murrayは、上述の定義や内容に沿って、20項目からなる「自己愛」を測定する質問紙を開発した。項目例としては、①自分がどんなふうに見え、どんな印象を他人に与えるか、しばしば心配になる、②私の感情は他人から嘲られたり、ちょっとした批判ですぐ傷つけられる、③私は成功の名声を他人と分かつことを好まない、などが挙げられる。

このMurrayの研究を参考にして、わが国で一連の自己愛の研究を行ったのが細井である。まず、細井(1978a, 1981)^{9), 11)}は、自己への強い関心の特徴とする自己愛が、妊娠・出産期に、より強く出現するのではないかという考えのもとに、妊産婦を対象に調査を行った。細井の自己愛測定項目は、上述のMurray(1938)の人格変数から、「自己愛」、「顕示」、「同一性」、「理想我」を選出し、その中から25項目を抽出、これに妊産婦に関する項目を加えて作成されている。項目例としては、

- ①時々脚色し、詳細を話す
- ②偉人や有名人を尊敬し、まねる
- ③自分のことを考えるのが好きだ
- ④勝手に他人を理解する
- ⑤自分の考えが正しいと思うことが多い

などが挙げられる。

そして、①妊婦は妊娠していない時期に比べ、感受性が強く自己愛傾向が強くなる。胎児よりも自己への関心が強まること、②妊娠中と産後の比較では、産後の方が自己愛傾向が増加し、物事に慎重であり、安定を求める同一性が強まる。一方、自己顕示と結びついた自己愛傾向には変化が見られなかったこと、等を見出している。

次に、細井(1977)⁸⁾、Hosoi(1981)¹²⁾では、細井(1978a, 1981)と同様に、Murrayの人格変数から「自己愛」、「顕示」、「同一性」、「理想我」の4変数を

* 千葉大学教育学部

とり挙げ、25項目からなる自己愛を測定する項目を作成した。これらの項目は、多少表現の異なる部分はあるものの、内容的には、細井 (1978a,1981) と全く同様である。この研究の目的は、健康な大学生男女の自己愛傾向の発達の (年齢的) 変化、性差について検討することである。自己愛を測定する25項目を因子分析したところ、①固着 (fixation)、②達成 (achievement)、③親和 (affiliation)、④顕示 (exhibition) という4因子が見出され、この4因子の年齢差、性差の検討を行った。その結果、「固着」、「達成」の因子では加齢とともに得点が高くなる傾向が、また、「顕示」の因子では、逆に加齢とともに得点が低くなる傾向が見られた。一方、性差については、「達成」の因子では男子の方が、「親和」および「顕示」の因子では女子の方が得点が高いという結果が見出された。

細井 (1978b,1984)^{10),13)} では、成人期中期の女性の自己愛の特徴を、他の年齢群との比較により検討した。対象は、大学生男女、妊婦、妊娠していない主婦であり、年齢は18歳から49歳にわたっていた。自己愛を測定する項目は、Hosoi (1981) の25項目であった。因子分析の結果、Hosoi (1981) とは多少異なり、①顕示傾向、②同一性傾向、③他者との関係から自己への関心を高める傾向、と命名される3因子が抽出され、各側面の得点の年齢差、性差、及び既婚・未婚や妊娠の有無による違いについて分析が行われた。そして、①「顕示傾向」は、青年期後期に次いで、40代後半、30代後半が高くなること、また、男子や未婚者において高く、既婚者では主婦の方が妊婦よりも高いことが見出された。②「同一性傾向」については、青年期では男子の方が高いこと、女子では既婚者の方が強いこと、また、年齢の上昇に伴いこの傾向が強くなること、妊婦より主婦の方が、初産婦より経産婦の方が高いことが分かった。③「他者との関係から自己への関心を高める傾向」については、男子の方がこの傾向が強く、女子では未婚者の方が強いこと、また、妊婦では、初産婦の方がこの傾向が強いこと、などを見出している。

これら細井の一連の研究は、Murray の指摘を基盤に、健常者の自己愛傾向の発達の流れを明らかにしようとした研究である。実証的研究としてはわが国で先駆的な意味をもち、評価すべき点も多い。しかし、測定に当たっての自己愛の定義の曖昧さや、一回の研究ごとに因子分析を行い、その都度異なる因子構造が得られるなど、基本的な測定上の問題で、幾つか難点を有しているように思われる。これらを克服することが

課題として残されているように思われるが、それ以後、まとまった研究としては発表されていない。

ところで、Murray (1938) の「自己愛」についての指摘は、DSM-IIIの自己愛人格障害の基準とも幾つかの点で重なる面があり、鋭い内容を含んでいる。このMurrayの研究は、その後、諸外国でも我が国でもそれほど利用したり発展させている者がおらず、我が国では、細井がその貴重な一人である。Murrayが提示した自己愛の構造の問題 (一方の極に対象愛、もう一方の極に自己蔑視、中間部に社会愛を位置づけた) などは、実証的に考察すべき有益な視点が含まれているように思われる。今後の研究に期待したい。

II. 投影法による自己愛の測定

自己愛の測定に用いられている投影法の検査としては、ロールシャッハ・テスト、TAT (Thematic Apperception Test)、SCT (Sentence Completion Test) などがある。

Exner (1969)⁵⁾ は、同性愛者、人格障害者、鬱病患者、正常者を対象に、ロールシャッハ・テストを実施し、「同性愛」群、「人格障害」群が他の群よりも、「反射 reflexion 反応 (水や鏡に映っているという反応)」及び「C+CF」の頻度が高いことを見出した。また第二研究で、50項目からなる文章完成検査 (NSCT) を1,547名の大学生及び労働者に実施し、その自己愛度を判定したところ、同様に、自己愛高群の方が低群よりも「反射反応」及び「C+CF」の頻度が高いことを見出している。

続くExner (1973)⁶⁾ では、Exner (1969) において作成された文章完成検査 (NSCT) を30項目に整理し (Self Focus Sentence Completion Test ; SFSC と命名)、その得点化カテゴリーを明確化し、分類の信頼性及び妥当性について検討した。そして、①自己焦点化 (S) (但しそれが否定的な場合は (Sn)), ②外的世界への焦点化 (E) (但し情緒的なものへの言及があるときは (Ea)), ③両価的態度 (A), ④中立的態度 (O), という6つのカテゴリーを設定し、評定マニュアルに基づいて、大学生・大学院生などに評定させたところ、分類の一致度はかなり高く、信頼性のあることが示された。また、非臨床群と臨床群 (分裂病、鬱病、青年期問題行動、精神病、同性愛など) を対象に、各カテゴリー得点を比較した。非臨床群 (正常群) では、SとEの得点に大きな差は見られなかったが、分裂病群、青年期問題行動群、精神病群、同性愛群では、その差が大きく、Sの得点がかなり高

くなることなどが見出された。Exner は、「SFSC」が自己中心性（さらに言えば自己愛傾向）を測定する尺度として妥当であると報告している。

次に、Harder (1979)⁷⁾ は、EMT (Early Memories Test), TAT, ロールシャッハ・テストの 3 種のテストの中から、「野心的-自己愛的性格」(ambitious-narcissistic character) を捉える指標を探索した。これまでの諸研究を参考に、それぞれのテストごとに、野心的-自己愛的性格を捉える指標を作成した。EMT では、①人を冒険や新しい場所へと導く乗り物の強調を伴う積極的な移動、②激しい活動、など 8 つの指標が、ロールシャッハ・テストでは、①探求者、すなわち新しい土地を探索する人物、②激しい身体的活動、など 6 つの指標が作成され、得点化が行われた。なお、TAT については、EMT とかなり類似した 5 つの指標が作成された。これら 3 種のテストを大学生に実施し、上記の指標の信頼性・妥当性について検討を行った結果、①採点の一致度は十分高いこと、②EMT, TAT, ロールシャッハ・テストそれぞれの得点の相関は、ロールシャッハ・テストと EMT との間が有意に至らなかった以外は、すべて有意な正の相関が得られた。また、③野心的な者ほど、EMT, TAT, ロールシャッハ・テストの得点が高いことなどが見出された。Harder は、これらのテストによって野心的-自己愛的性格を十分捉え得ると主張している。

以上の 3 つの研究は、単なる質問紙ということではなく、被験者の深層に焦点を当てたかたちでの、自己愛の測定に関する研究である。その点は評価できるが、いかんせん、研究の蓄積という視点から見たとき、その数も少なく、十分成熟しているとは言いがたい。これらの追試・発展研究がさらに望まれるところである。特に、Exner (1969) のロールシャッハ・テストの指標は一般性がありそうに思われ、その信頼性・妥当性に関する新たな研究の出現を望みたい。

Ⅲ. Raskin の NPI による自己愛の測定

Raskin & Hall (1979)³²⁾ は、当時刊行に向けて準備されていた DSM-III (1980 年発行) に、新たに自己愛人格障害 (narcissistic personality disorder) という診断カテゴリーが設定されるのを受けて、新たな測定具の作成を試みた。Raskin & Hall (1979) によれば、DSM-III において自己愛人格障害を示す人の特徴は、次の 8 点に要約される。即ち、①自分が重要であるという誇大感、②際限のない成功や権力、才気、美しさ、理想的愛の空想に対するとらわれ、③自

己宣伝癖、④批判や無関心、敗北に対する反応が、冷ややかな無関心、または顕著な激怒、劣等感、恥辱、屈辱の感情のいずれか、⑤権利の付与、即ち、相互の責任性を考えずに特別の好意を期待すること、⑥搾取、⑦関係が過度の理想化と卑下との間を揺れ動くこと、⑧共感性の欠如、である。

これに基づいて、彼らは、二者択一形式の 223 項目（一方の選択肢が自己愛を、もう一方が非自己愛を示す項目）を作成し、大学生に実施した。そして、項目分析を経て、80 項目を選定した。また、これらが十分な信頼性をもつことを確認したうえで、これらの項目を、各 40 項目からなる FormA, FormB の 2 つに分割した。ここに、自己愛的人格目録 (Narcissistic Personality Inventory; NPI) の試案ともいうべきものが完成された。項目例としては、

- (a) 私は注目の中心でありたいと思う。
- (b) 注目の中心になることは私にとって心地よいことではない。

などが挙げられる。この場合、(a) を選択したとき、「自己愛的」と判定される。

この NPI の項目は、DSM-III の「自己愛的人格障害」の基準に基づいて作成されており、[1] で述べたような問題点もあるが、正常人の人格特性ないし人格傾向をも含めた自己愛の測定を実現したという点で、その功績は高く評価されるべきであろう。その証拠に、NPI 発表以後、これを用いた数多くの研究が登場し、幅広い自己愛研究が開花していったのである。それでは、Raskin & Hall (1979) 以降の、NPI を用いた研究を簡単に展望してみよう。その多くが、NPI の信頼性や妥当性に関するものである。

まず、Raskin & Hall (1981)³³⁾ は、NPI の信頼性及び構成概念妥当性について検討している。彼らは、NPI の FormA を実施後、8 週間して NPI の FormB と EPQ (Eysenck Personality Questionnaire) を実施した。その結果、① NPI の FormA と FormB との間には高い相関が得られた。また、② NPI は、EPQ の「外向性」、「精神病」尺度との間で正の有意な相関、「虚偽」尺度との間で負の有意な相関を示した。これらの結果から、彼らは、NPI が安定性の観点からみて信頼性を有し、構成概念妥当性もあると報告している。

Emmons (1981)²⁾ は、sensation seeking との関連を分析することにより、NPI の妥当性について検討した。そして、NPI 得点は、全般的に、「経験探求」(experience seeking)、「非抑制」(disinhibition)、

「退屈への敏感さ」(boredom susceptibility) などの下位尺度と正の有意な相関を示し、NPI には妥当性があると論じている。

Watson et al. (1984)⁴¹⁾ では、共感性等との関連に基づいて、NPI の妥当性の検討を行っている。共感性を測定する尺度としては、Hogan (HES), Mehrabian & Epstein (MEES), Smith (SEPQ) の 3 種類の尺度が用いられた。その結果、NPI は、MEES 及び SEPQ と負の有意な相関を示し、その妥当性が確認されたと報告している。

Prifitera & Ryan (1984)³⁰⁾ は、やや臨床的な観点から NPI の妥当性について検討している。彼らは、精神病患者を対象に NPI と Millon のミロン臨床的多軸目録 (Millon Clinical Multiaxial Inventory; MCMI) を実施し、両者の関連を分析した。その結果、NPI 得点は、MCMI の下位尺度の「社交的演技的」(gregarious-histrionic), 「自己愛的」(narcissistic), 「攻撃的反社会的」(aggressive-antisocial) と正の有意な相関, 「非社会的」(asocial), 「回避的」(avoidant), 「従順的依存的」(submissive-dependent) と負の有意な相関示したことなどから、臨床群においても、NPI の妥当性が認められたことを報告している。

しかし、Auerbach (1984)¹⁾ が、正常人を対象に Prifitera らとはほぼ同様の視点から検討を行ったところ、NPI は、MCMI とは正の有意な相関を示したが、同時に実施した「社会的望ましさ」尺度とは有意な相関が得られず、さらに検討の余地があると指摘している。

一方、これまで測定上一次元的なものとして処理されてきた NPI に因子分析を適用し、多次元的な構造を明らかにしたのが、Emmons (1984)³⁾ である。彼は、因子分析を通して、NPI が、① 搾取・権威づけ、② 指導力・権威、③ 優越・傲慢、④ 自己陶醉・自己賛美という 4 因子から構成されていることを見出した。Emmons (1984) では、これに加えて、NPI の妥当性についての検討も行われた。EPPS (Edwards Personal Preference Schedule), 16 PF, EPI (Eysenck Personality Inventory) などとの関連、また、「自己愛」に関する他者評定との関連などから、NPI は妥当性の十分な尺度であると報告している。

また、Emmons (1987)⁴⁾ では、上記の NPI の因子分析的な研究の追試とともに、新たな視点から、NPI の妥当性について検討している。因子分析の結果では、Emmons (1984) と同様の 4 因子が見出され、NPI

が安定した因子構造をもつことを確認している。妥当性については、Millon の MCMI の下位尺度、後述する Solomon の「自己愛的人格障害尺度」(Narcissistic Personality Disorder Scale), 種々の自己主義 (selfism) や自己中心性を捉える測度との関連などを分析し、NPI の妥当性はさらに確かなものになったと述べている。

NPI の信頼性や妥当性に関する研究の最後は、Raskin & Terry (1988)³⁵⁾ である。彼らは、Emmons (1984, 1987) とは別の観点から、NPI の多次元性についての検討を行うとともに、「他者からの観察」という視点から NPI の妥当性について検討を加えた。彼らは NPI について主成分分析を行い、① 権威、② 自己満足、③ 優越、④ 自己宣伝癖、⑤ 搾取、⑥ 虚栄心、⑦ 権威づけ、と命名しうる 7 成分を抽出した。「他者からの観察」の測度は、研究スタッフが、22 の特性語 (「自己愛」, 「支配」, 「外向」など) のそれぞれについて、① 一群の被験者を順位づけすること、② 各被験者について Q 分類を実施すること、によって収集された。それ以外に、CPI (California Psychological Inventory) などの自己報告的測度も実施した。その結果、NPI と、「観察的測度」の「自己愛」, 「支配」, 「外向」などとの間に有意な相関が、また、CPI の「支配」などとの間に高い正の相関が得られた。Raskin らは、これらの結果から NPI は十分な妥当性をもつと考察している。

以上、Raskin & Hall (1979) により作成された NPI は、作成から 10 年が経過し、様々の視点から信頼性や妥当性の検討が行われ、ほぼその地位も安定したものとなりつつある。今後は、種々の人間関係を解明したり、臨床現場で、より大きな力を発揮することとなろう。

次に紹介する 2 編の論文は、NPI の信頼性や妥当性を検討したものではないが、NPI が測定している人格特徴の一端を明らかにしているので、併せて紹介しておきたい。

Raskin (1980)³¹⁾ は、自己愛と創造性 (バロン象徴的等価検査 Barron Symbolic Equivalents Test) との関連を検討し、両者に低ながらも有意な正の相関があることを見出している。また、Joubert (1986)¹⁴⁾ は、自己愛と「社会的関心」, 「孤独感」との関連を検討し、自己愛は「社会的関心」と負の有意な相関を示したことを報告している。

以上のように、NPI を用いた「自己愛」の研究は、諸外国においてかなり活発に行われている。こうした

状況に刺激されてか、我が国においても、80年代半ば頃よりNPIを利用した数多くの研究が発表されはじめた。次に、NPIを用いたわが国の研究を展望していきたい。

まず、宮下・上地(1985)¹⁹⁾は、Raskin & Hall(1979)のNPIを7段階評定に変換し、日本版として利用すべく研究を行った。二者択一法を7段階評定に変えた理由としては、正常人の自己愛を測定するという点をさらに明確にするには、両極の反応から一つを選ばせるというよりも、その程度を問題にしていく方が適切と考えたためである。Emmons(1984)の因子分析の結果に基づき、比較的高い負荷を有する38項目を選択し、翻訳した。そして、項目分析を経て、十分な信頼性を有する35項目からなる日本版NPIを作成した。宮下・上地(1985)¹⁹⁾では、このNPIを用い、自己愛と顕在不安、潜在不安、欲求不満事態における反応との関係について検討が行われ、自己愛高群が「潜在不安」、及び「外罰的反応」の程度が高いことなどを見出している。

また、佐方(1986)³⁷⁾は、自己愛的人格を測定する質問紙の作成を意図して、Raskin & Hall(1979)のNPIやDSM-IIIの「自己愛的人格障害」の記述などを参考にして、60項目を作成し、項目分析、因子分析等を経て、3因子42項目からなるNPIを完成させた(5段階評定)。3因子はそれぞれ、①優越性・指導性・対人影響力、②自己顕示・自己耽溺、③自己有能性・自信、と名づけられた。そして、このNPIは、十分な信頼性を有するとともに、Y-G性格検査の「攻撃性」、「一般的活動性」、「支配性」、「社会的外向性」などと有意な正の相関を示し、一応の妥当性を備えていることを報告している。

佐方(1987)³⁸⁾は、さらに自身が作成したNPIの妥当性を検討するために、Y-G性格検査、MPI(Maudsley Personality Inventory)、MMPI(Minnesota Multiphasic Personality Inventory)との関連について分析している。その結果、NPI得点は、Y-Gの「気分の変動」、「攻撃性」、「一般的活動性」、「のんかさ」、「支配性」と正の有意な相関、また、MPIの「虚偽尺度」得点と有意な負の相関、MMPIの「抑鬱性」、「精神衰弱性」、「社会的内向性」などと負の有意な相関を示した。そして、佐方は、これらはNPIが測定しようとした自己愛的人格傾向と一致する結果(即ち、NPIの妥当性は十分)であると述べている。

さらに、佐方(1988)³⁹⁾は、同一性拡散の特徴の一

つとして自己愛的傾向等を想定し、その関係を検討した。しかし、NPIの一部の下位尺度を除き、両者の間に有意な関連を見出すことはできなかった。

大石(1987,1988,1989)も、RaskinらのNPIに刺激されたかたちで、ナルシズム研究にとりかかった一人である。彼は、RaskinらのNPIを日本人向けに意識して翻訳し、二者択一方式の54項目からなる日本版NPIを作成した(得点化するのは52項目である)。大石(1987)²⁵⁾では、その妥当性について、Y-G性格検査を用いて検討している。そして、日本版NPIは、全体として、Y-Gの「攻撃性」、「一般的活動性」、「のんかさ」、「支配性」、「社会的外向性」とは正の、「劣等感」とは負の有意な相関を示したことなどを報告している。また、大石(1988)²⁶⁾では、CMI(Cornell Medical Index)、MMPIとの関連を検討している。さらに、大石(1989)²⁷⁾においては、「共感性」等との関連が検討され、NPI得点は「共感性」と低いながら有意な負の相関を示したことなどが報告されている。この大石の作成したNPIは、「共感性」などとの関連が低いことから、今後さらに改善の必要があると言えるかもしれない。

続いて、大平(1988)²³⁾は、佐方(1986)が作成したNPIを用いて、不安(C. A. S.を使用)との関連の検討を行った。そして、自己愛の総得点と不安の間には有意な相関が得られなかったが、彼がNPIを新たに因子分析して抽出した下位尺度のうち、「利己性・一方的な権利の主張」が不安と正の有意な相関を示したことなどを報告している。また、大平(1989)²⁴⁾は、自己愛的人格のいわゆる自己愛的怒りに着目し、その実証的検討を行った。彼は、被験者を「生理的喚起」やNPI得点の程度により分割し、呈示された例話事態(欲求不満を惹起させる)で彼らを感じる怒りの程度や言語的攻撃の程度などを評定させた。そして、自己愛が強いかつ喚起レベルが高いほど、怒り・言語的攻撃がともに強いというほぼ予想された結果を見出している。これらの大平の結果は、これまでの自己愛研究で得られた結果とほぼ整合するものであるが、生理的な面も加味して行った点で興味深い研究と言える。今後の研究に注目したい。

葛西(1989)¹⁵⁾も、佐方(1986)のNPIを使用して、自己愛的人格と「他者からの孤立」との関連を検討した。そして、両者に有意な正の相関があることを見出し、仮説を検証している。また、葛西(1990)¹⁶⁾では、自己愛的人格と「対人態度」との関連について分析し、自己愛的傾向の強い人ほど、男女とも、他者と対立し

たり、防衛的に孤立する傾向があること、さらに女子では、自己愛的傾向が強いほど、他者に同調したり、依存したりする傾向があることなどを見出している。これらの葛西の研究は、自己愛的傾向の特徴を対人関係の面から明らかにしようとする研究であるが、特に性差について分析を加えている点には興味もたれる。自己愛に関して、このような性差は殆ど取り挙げられていないように思われ、さらに研究の蓄積が期待される。

この項の最後に、宮下(1991)¹⁸⁾の自己愛の原因に焦点を当てた研究を紹介する。自己愛の原因については幾つかの説があるが、「乳・幼児期」の母親との関係はその最も重要なものの一つであろう。KernbergやKohutの理論でも、この点については共通の指摘がなされている。宮下(1991)は回想法(これまでの養育態度を総合的に回想してもらう)を利用して、この点の検討を行った。そして、母親の養育態度のみならず、父親の養育態度などについても検討を加えた。その結果、女子では、NPI得点(宮下・上地, 1985による)と、母親の「情緒的支持・受容」の養育態度とは負の有意な相関、また「情緒不安定」の養育態度とは正の有意な相関が得られ、男子では、父親の「支配・介入」の養育態度と正の有意な相関が得られた。女子においては、これまでの自己愛の理論で言及されている点がほぼ実証的に確認された。ここで明らかにされた、自己愛の形成に関する性差については、これまで殆ど言及されておらず、今後の研究によりさらに明確にされる必要がある。

以上、わが国においてなされてきたNPIに関連する諸研究の展望を行った。NPIを用いた研究は、ここ数年急激に増えており、今後も着実に増加していくと思われる。これまでの研究は、主として、NPIの信頼性や妥当性、自己愛の人格の特徴を明らかにするなどの基礎的研究であったが、今後は、より幅広い視点からの取り組みが期待される。また、我が国では、同じくNPIという名称で呼ばれているが、形式や内容の少しずつ異なる3つの尺度(宮下・上地, 1985; 佐方, 1986; 大石, 1987)が存在している。これらの尺度の関連やその一本化についての研究なども今後の発展課題といつてよからう。

IV. MMPI を利用した自己愛の測定

NPIの発表より少し遅れて、尺度の宝庫であるMMPIを利用して、自己愛の測定を目指す研究が登場した。Solomon(1982)がそれである。

Solomon(1982)⁴⁰⁾は、MMPIから、①私は性生活に満足している、②私は一つのことに注意を集中することができない、など19項目を抽出し、自己愛人格障害の尺度構成を行った。そして、この19項目の得点と、テネシー自己概念尺度得点(得点が高いほど健康的な自己愛を示す)、「愛情関係への満足な関わり」の程度、「悪夢」の頻度等との関係を検討したところ、自己概念尺度及び「愛情関係への満足な関わり」との間には負の有意な相関が、また、「悪夢」とは正の有意な相関が得られた。Solomonは、この結果に基づき、その妥当性について論じている。このSolomonの尺度は、NPIとは明確に異なり、病理的な面での自己愛の測定を目指している点が特徴といえる。

Solomonとは若干異なる視点から、MMPIの自己愛の指標について検討を加えたのが、Raskin & Novacek(1989)³⁴⁾である。彼らは、MMPIとともにRaskin & Hall(1979)のNPIを実施して、両者の関係について検討を行った。その結果、NPIはMMPIの「軽躁性」(Ma)とは正の有意な相関、「抑鬱性」(D)、「精神衰弱性」(Pt)、「社会的内向性」(Si)、「不安」(A)、「抑圧」(R)、「自我統制」(Ec)とは負の有意な相関を示し、MMPIを用いたナルシズムの測定が可能であることを示した。

これら2つの研究は、MMPIという臨床的な検査を利用して、自己愛の測定を目指しているという試みであり、それ自体、自己愛のやや病理的な側面を捉えていこうとする研究である。その点で、NPIによる測定とは若干傾向が異なる研究といってよい。こうした研究は、自己愛の臨床的診断の意味からすれば、貴重な研究と言えるであろう。

V. 自己愛の測定に関するそれ以外の諸研究

この項はこれまでに比べてやや内容の一貫性には欠けるが、上記のもの以外に重要な研究が幾つかあるので紹介したい。

まず、Patton et al.(1982)²⁸⁾は、Kohutの「自己心理学」の理論をカウンセリングに応用できるよう、各8段階からなる10の尺度を作成した。彼らは、Kohutの「自己」の発達における2つの領域(「誇大自己」と「理想化された親イメージ」)の考えに基づき、幼穉的自己からまとまりのある大人の自己に至るプロセスを測定する尺度を開発した。これにより、臨床的な治療の成果が具体的に把握できると考えたのである。測定尺度の内容は次の通りである。即ち、Kohutの理論に沿って、「誇大自己」の領域では、

「自己顕示→自己主張→野心」のプロセスを、また、「理想化された親イメージ」の領域では、「理想化→賞賛→目標」のプロセスを考えた。そして、この各側面（合計6側面）を測定する尺度を開発した。また、これに加えて、まとまりのある大人の自己の特徴として4つの側面を取り挙げ、合計10の測定尺度を完成させたのである。それら尺度の名称は、次の通りである。①自己呈示様式、②自己主張、③野心、④他者からの分化、⑤他者の賞賛、⑥目標、⑦共感性、⑧自尊心制御の所在、⑨緊張耐性、⑩能力の使用。このうち、①～③が「誇大自己」の領域、④～⑥が「理想化された親イメージ」の領域、⑦～⑩が「まとまりのある大人の自己」がもつ重要な機能を意味している。これら10の尺度はそれぞれ8段階で評定する仕組みになっており、各被験者の「自己」のあり方がマニュアルに従って、細かく判定される。例えば、「野心」の尺度では、「日常生活の課題においてそれを成し遂げようとする意志の慢性的な欠如」を示している場合に「段階1」、「自己の成就へ向けての計画を熱心に追求している」ような場合に「段階8」などと評定するのである。Patton et al. (1982) では、この尺度の評定者間の信頼性なども検討され、十分な信頼性を有することが明らかにされている。Kohutの理論を臨床場面で有効に活用していこうとするこの研究は、まだ始まったばかりとはいえ、有益な研究の一つであろう。この尺度が、臨床現場で、実際に力を発揮する日もそれほど遠くないかもしれない。

また、Robbins & Patton (1985)³⁶⁾ は、Kohutの理論が、「職業的発達」を考察する上で参考になると考え、まずKohutの双極自己を構成する、①「誇大性」(grandiosity)と②「理想化」(idealization)に着目し、それぞれを測定する尺度を開発した。因子分析、信頼性、妥当性の検討などを経て、「目標不安定」(「理想化」に対応)及び「優越性」(「誇大性」に対応)と命名する2尺度(各10項目)を作成した。Robbins & Patton (1985) では、この尺度を用いて、①自己の重要性についての過大評価や自己の偉大さを確認するために他者を利用する人は、職業設計の追求にあまり関わろうとしない、②目標指向性の欠如や計画を始めることが難しい人は、職業面での決断力の欠如を示す、という2つの仮説を検証することが主目的であった。そして、分析の結果、「優越性」が職業追求の欠如を、また、「目標不安定性」が職業面での決断力の欠如を示すことが明らかにされ、ほぼ仮説を検証する結果が見出された。Kohutの自己発達の

理論から「職業的発達」を説明した点は特異だが、職業的発達に対する新たな視点からの切り込みとして注目される。

次に取り挙げるのは、O'Brienの2つの研究である。O'Brien (1987)²¹⁾ は、病理的な自己愛の測定を目指し、O'Brien多面的自己愛質問票(O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory; OMNI)を作成するとともに、妥当性について検討を行った。O'Brienは、Miller (1981)の理論に基づいて病理的な自己愛を測定する項目を作成し、①自己愛人格、②有害な教育、③自己愛的に虐待された人格、と名づける3因子、41項目からなるOMNIを構成した。項目例を挙げると、①あなたは器量のよい人が嫉ましいですか、②あなたは批判されると恥辱を感じるほうですか、③あなたは個人的な生活について秘密にしたい方ですか、などである。そして、このOMNIの妥当性について、NPIやEPI等との関連によって分析したところ、かなり予想に近い結果が得られた。O'Brienは、OMNIには十分な妥当性があると考察している。

続く、O'Brien (1988)²²⁾ では、臨床群を対象にOMNIの因子構造を検討するとともに、正常群との比較・検討を行った。臨床群は、心理治療を受けている患者(すべて一次的あるいは二次的に自己愛人格障害と診断された者)である。正常群のデータは、O'Brien (1987)のものが利用された。その結果、臨床群においても同様の3因子が抽出され、またその3因子すべてにおいて臨床群の方が高得点を示すことが明らかにされた。

このO'Brienの尺度は、自己愛の病理的な面の測定という点では、MMPI尺度と類似している。ただ、Solomon (1982)のMMPI尺度に比べて、項目数も多く、自己愛をより直接的に測定していることなどから、MMPIによるものよりは若干優れており、より研究の発展性があるように思われる。

最後に、意図的に自己愛という語を避けて、「自己主義」(selfism)という観点から尺度構成を行ったPhares & Erskine (1984)²³⁾の研究を紹介する。彼らは、項目分析を通して28項目からなる「自己主義」尺度(項目例:①あなた自身のことをまず第一に考えるのは、今日の世界において罪なことではない、②私のいない世界を想像することなどできないことである)を作成した。そして、これに再検査法や内的整合性の観点からの信頼性の検討などを行い、十分な信頼性、妥当性を備えた尺度であると報告している。

VI. ま と め

以上、本論文では、自己愛の測定に関する研究を、Murrayの先駆的研究、投影法による測定、RaskinのNPIによる測定、MMPIによる測定、それ以外の諸研究、に分けて展望した。

「自己愛」に対する関心は今後益々強まると思われるが、「測定」の問題はその最も基盤となる部分であり、臨床実践とともに、今後も研究が集中していくことが予想される。このような傾向の中で今求められていることといえば、様々の尺度の氾濫ではなく、妥当性のある尺度（測定具）による研究の蓄積であろう。

この点で注目したいのは、Exner (1969)のロールシャッハ・テストを利用した研究、Raskin & Hall (1979)のNPIを利用した研究、Patton et al. (1982)の研究、O'Brien (1987)の研究などである。これらの研究をうまく発展させていくことによって、「自己愛」の測定の問題はいよいよ成熟へと向うことができるように思われる。

以上の展望に基づいて、我々は今後、自己愛の発達や障害を測定する新たな尺度の作成を行いたいと考えている。

引 用 文 献

- 1) Auerbach, J.S.: Validation of two scales for narcissistic personality disorder. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 649-653, (1984).
- 2) Emmons, R.A.: Relationship between narcissism and sensation seeking. *Psychological Reports*, **48**, 247-250, (1981).
- 3) Emmons, R.A.: Factor analysis and construct validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300, (1984).
- 4) Emmons, R.A.: Narcissism: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 11-17, (1987).
- 5) Exner, J.E.: Rorschach responses as an index of narcissism. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, **33**, 324-330, (1969).
- 6) Exner, J.E.: The Self Focus Sentence Completion: A study of egocentricity. *Journal of Personality Assessment*, **37**, 437-455, (1973).
- 7) Harder, D.W.: The assessment of ambitious-narcissistic character style with three projective tests: The early memories, TAT, and Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, **43**, 23-32, (1979).
- 8) 細井啓子: 青年期におけるナルシズム的傾向. 日本教育心理学会第19回総会発表論文集, 470-471, (1977).
- 9) 細井啓子: 妊産婦におけるナルシズム的傾向—ナルシズムの研究2—. 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 136-137, (1978a).
- 10) 細井啓子: 女性におけるナルシズム的傾向—ナルシズムの研究3—. 日本心理学会第42回大会発表論文集, 978-979, (1978b).
- 11) 細井啓子: ナルシズム的傾向に関する発達の研究(1)—妊産婦について—. *心理学研究*, **52**, 38-44, (1981).
- 12) Hosoi, K.: A developmental study of narcissistic tendency (2): In adolescence. *Japanese Psychological Research*, **23**, 160-168, (1981).
- 13) 細井啓子: ナルシズム的傾向に関する発達の研究(3)—成人期中期の女性について—. *心理学研究*, **55**, 113-116, (1984).
- 14) Joubert, C.E.: Social interest, loneliness, and narcissism. *Psychological Reports*, **58**, 870, (1986).
- 15) 葛西真記子: Narcissistic Personalityにおける対人関係(1). 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 235, (1989).
- 16) 葛西真記子: Narcissistic Personalityにおける対人関係(3). 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 219, (1990).
- 17) Miller, A.: The drama of the gifted child. Basic Books, (1981). (ドイツ語版よりの翻訳) 野田倬訳, 才能のある子のドラマ, 人文書院, (1984).

- 18) 宮下一博：青年におけるナルシズム（自己愛）的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係，*教育心理学研究*, **39**, 455-460, (1991).
- 19) 宮下一博・上地雄一郎：青年におけるナルシズム（自己愛）的傾向に関する実証的研究(1). *総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集*, **1**, 51-61, (1985).
- 20) Murray, H.A.(Ed.): *Explorations in personality*. Oxford University Press, 1938. 外林大作 訳：パーソナリティ I・II, 誠信書房, (1961).
- 21) O'Brien, M.L.: Examining the dimensionality of pathological narcissism: Factor analysis and construct validity of the O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory. *Psychological Reports*, **61**, 499-510, (1987).
- 22) O'Brien, M.L.: Further evidence of the validity of the O'Brien Multiphasic Narcissism Inventory. *Psychological Reports*, **62**, 879-882, (1988).
- 23) 大平英樹：自己愛人格と不安の関係－自己愛人格目録(NPI)の検討－. *日本心理学会第52回大会発表論文集*, 110, (1988).
- 24) 大平英樹：自己愛人格における怒りの感情と攻撃的行動－生理的喚起の促進作用に着目して－. *日本心理学会第53回大会発表論文集*, 154, (1989).
- 25) 大石史博：ナルシズム的人格に関する研究(2)－YG性格検査との関係について－. *日本心理学会第51回大会発表論文集*, 535, (1987).
- 26) 大石史博：ナルシズム的人格に関する研究(3)－CMI, MMPIとの関係について－. *日本心理学会第52回大会発表論文集*, 109, (1988).
- 27) 大石史博：ナルシズム的人格に関する研究(4)－共感性との関係について－. *日本心理学会第53回大会発表論文集*, 155, (1989).
- 28) Patton, M.J., Connor, G.E., & Scott, K.J.: Kohut's psychology of the self. *Journal of Counseling Psychology*, **29**, 268-282, (1982).
- 29) Phares, E.J., & Erskine, N.: The measurement of selfism. *Educational and Psychological Measurement*, **44**, 597-608, (1984).
- 30) Prifitera, A., & Ryan, J.J.: Validity of the Narcissistic Personality Inventory (NPI) in a psychiatric sample. *Journal of Clinical Psychology*, **40**, 140-142, (1984).
- 31) Raskin, R.N.: Narcissism and creativity: Are they related? *Psychological Reports*, **46**, 55-60, (1980).
- 32) Raskin, R.N., & Hall, C.S.: A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590, (1979).
- 33) Raskin, R., & Hall, C.S.: The Narcissistic Personality Inventory: Alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **45**, 159-162, (1981).
- 34) Raskin, R., & Novacek, J.: An MMPI description of the narcissistic personality. *Journal of Personality Assessment*, **53**, 66-80, (1989).
- 35) Raskin, R., & Terry, H.: A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902, (1988).
- 36) Robbins, S.B., & Patton, M.J.: Self-psychology and career development: Construction of the superiority and goal instability scales. *Journal of Counseling Psychology*, **32**, 221-231, (1985).
- 37) 佐方哲彦：自己愛人格の心理測定－自己愛人格目録(NPI)の開発－. *和歌山県立医科大学進学課程紀要*, **16**, 77-86, (1986).
- 38) 佐方哲彦：自己愛人格目録(NPI)の妥当性に関する研究－Y-G検査およびMMPI, MMPIとの相関から－. *日本教育心理学会第29回総会発表論文集*, 538-539, (1987).
- 39) 佐方哲彦：同一性拡散の心理的特徴の一側面－自己愛傾向および共感性との関係－. *日本心理学会第52回大*

会発表論文集, 108, (1988).

- 40) Solomon, R.S. : Validity of the MMPI Narcissistic Personality Disorder Scale. *Psychological Reports*, 50, 463-466, (1982).
- 41) Watson, P.J., Grisham, S.O., Trotter, M.V., & Biderman, M.D. : Narcissism and empathy : Validity evidence for the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 301-305, (1984).

ABSTRACT

Development and Disturbance of Narcissism, and Their Measurement: An Overview [2]

Yuichiro KAMIJI & Kazuhiro MIYASHITA

The aim of this paper was to review psychological researches on narcissism in which psychological tests and inventories were utilized.

We divided the researches into five groups. They were, (1) researches on the basis of Murray's ideas, (2) researches by means of projective methods, (3) researches using Raskin & Hall's NPI, (4) measurements of narcissism with MMPI items, (5) the other researches. The important issues of each group were discussed.

We have found much promise in the studies by means of Raskin & Hall's NPI, Patton et al. (1982), O'Brien(1987), and so on.

We have already developed the Japanese version of NPI (Miyashita & Kamiji, 1985), but there are some problems in NPI (including its Japanese version). We are planning to develop a new inventory measuring narcissistic or self disorders.

Key Words : narcissism, inventory, Murray, NPI, Patton et al., O'Brien

平成 4 年 3 月 13 日 受付

平成 4 年 3 月 23 日 受理